**吉備真備初回在唐活動の再考察：《李訓墓誌》における歴史的可能性**

**概要**

唐で骨を埋めた阿倍仲麻呂と名を並び、遣唐使時代にて中国で名が挙げられた日本留学生吉備真備は、唐文化の日本伝来に対して大した役割を果たし、古代日本文化の土台を作ってあげたほどとされる、古代中日交流史分野において重視される人物である。

2019年12月25日、唐の官員、鴻臚寺丞李訓の墓誌が北京で公開された。末「日本国朝臣備書」の一行から、この墓誌の書丹者は吉備真備であったのか、なお墓誌の真偽問題に関し、中日学界において幅広くて熱々な議論ないし争鳴までも引き起こされた。吉備真備と鴻臚寺との繋がりから李訓墓誌の可能性に関し、すでに先行研究の学者により多く論議がされたことがある。私の方からは主に以下の二点から墓誌の可能性を探る。

まず、『扶桑略記』に見られる真備が在唐した期間学んで身に付けた十三道の学問や技能より、彼が国子監卒業後、唐の朝廷から生活の支援がない十年近い期間、自分の身に付けた様々な技能を以て生活を維持していた姿が復元される。要するに、李訓墓誌書丹は唐の官署から頼まれた仕事の中の一つとなる、と推測される。この墓誌が偽造物でなければ、当時の日本留学生たちの在唐活動並びにその官署との繋がり、官員たちとの触れ合いなどの事情を窺う重要な実物文献となるにちがいない。

一方、周りの関係文献からも真備の唐秘書省との関係も窺われ、墓誌書丹の可能性を一層高める証拠となるのであろう。『唐会要』によれば、唐の官員の墓誌作成は実に秘書省により手配されることになっている。特に彼が従事された「歴道」、「天文」などは秘書省太史局の業務範囲に入るものである。これらの技法を学んだ場合は太史局が開かれた専門学校に通った可能性が推測される。なお、その二度目の在唐期間、秘書監の職を被られた史実からその初回在唐期間、秘書省業務の馴染むことや、この機関との往来や交渉などの事情も窺われる。このように、書道が得意な真備が李訓が亡くなった後、秘書省にその墓誌書丹の作成を任せられた可能性も見落としてはいけないのである。

結論として、吉備真備が初回在唐期間、留学生管理の事務を担当する鴻臚寺の官員と触れたことがある、李訓などの官員とは知り合いとなったかもしれない。そして、国子監から卒業した後、様々な技を身に付けた彼が時々唐の官署に頼まれ、臨時的な仕事をやらせてもらったことがあるとわかる。その中、特に秘書省と深い関係があると推測されるもので、文献の記載並びに周辺の史実との関連性からみれば、李訓墓誌そのものは歴史的可能性が備わっている、と考えなければならない。とはいえ、墓誌の真偽に関して、なお様々な疑点が残されるもので、今後、関連文献や史実と合わせて、より深く検討していく必要がある、と考える。